

エプスタインの自殺とその周辺

結城 洋一郎

英国王室をも巻き込んだ「性的搾取コネクション」の首謀者ジェフリー・エプスタインが昨年八月、自殺防止監房内で「首吊り自殺のような状態」で発見されておよそ一年後の今年七月二日、今度は彼の恋人ギスレーン・マクスウェルが逮捕されて衝撃が走っている。

アメリカは重要人物がよく不慮の死を遂げる国で、ケネディ大統領暗殺事件では、JFKの他、多数の関係者が死に、最近ではクリントン夫妻を巡る各種疑惑の関係者たちが事故や自殺や銃撃などで次々とこの世を去っている。

また、マフィアの草創期、ある大幹部が司法取引で内情を法廷で証言する直前に、FBIの厳重な警護の中、ホテルの一室から転落「自殺」を遂げた。この時、新聞は彼を、「歌えても飛べなかつたカナリア」と揶揄したのだが、エプスタインは歌うことも飛ぶこともできなかつたわけである。

このエプスタインという人物はユダヤ系の富豪投資家なのだが、その財産形成の経緯は謎に包まれている。彼は中流家庭出身の大学中退生に過ぎなかつたにもかかわらず、何故か著名な私立学校「ドルトン・スクール」の教師に採用され、同校父兄のユダヤ系富豪の

縁故で、他の資産家や、エフロード・バラック元イスラエル首相（&元参謀総長）等の軍事情報関係者、更にはクリントン夫妻、トランプ大統領、英国のアンドルー王子など、各国政財界の中枢に人脈を拡げていった。

こうした華麗な人脈形成には恋人ギスレーンの貢献が大きいと考えられている。彼女の父ロバート・マクスウェルは英国の元メデア王にしてモサド要員と見られ、彼女自身は、アンドルー王子と極めて懇意だったし、エプスタイン主催の性接待とハニートラップ（美人局）用の青少年をリクルートする役割を担っていたと思われるからである。

性的スキヤンダルによる脅迫と支配は、アメリカではフーバーFBI初代長官が得意とした手法と言われ、彼の手先だったロイ・コーン（ユダヤ系弁護士）の死後、エプスタインがその役を引き継いだと見られている。そしてエプスタインは要人たちを「ロリータ・エクスプレス」と綽名される自家用ジェットで、通称「ペド・アイランド」（小児性愛島）と呼ばれる私有の小島に招待し、彼らがギスレーンの調達してきた男女と過ごすひと時を盗聴・盗撮していた。彼の自宅からは、その参加者名簿と大量の映像が押収されている。

司法長官ウイリアム・バーは、エプスタインの死後も捜査を続けると述べていたが、それが何の進展も見せないなか、このたびギスレーンが逮捕されたのだった。（因みに、バーの父親もユダヤ系で、「ドルトン・スクール」がエプスタインを採用した時の校長である。）ところで、エプスタインはMIT（マサチューセッツ工科大学）の「メデアアラボ」の伊藤穰一所長（当時）ともつながっていて、二人はビル・ゲイツなどの富豪から大学への寄付金を集め、伊藤氏はエプスタインから億（円）単位の寄付を受けていたという。

この伊藤氏もまた、研究歴は全くない、大学を中退してクラブのDJなどをやっていた人物なのだが、何故か警察庁の「情報セキュリティビジョン」の策定委員を勤め、MITに抜擢され、更には、近頃話題の電通と共同事業などを行っているのだそうである。

さて一方のゲイツ氏は、感染症とワクチンの研究、個人認証システムや新たな核燃料の開発、更には世界の人口抑制に強い関心を示し、エプスタインと共にその研究に多額の資金を提供してきた。そして、昨年一〇月にはパンデミック・シミュレーション「イベント201」にも参画して社会の各分野にわたる感染症対策を研究したわけだが、その直後に発生した今回の感染爆発に際し、世界の富豪たちは都市封鎖や株価変動等への対応を通じて資産を急速に増加させているという。何と不思議に絡み合った世の中だろう。

へゆつき よういちろう・小樽商科大学名誉教授